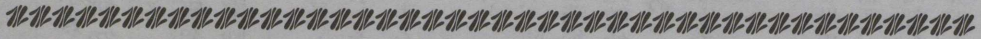


全 仏



No. 387

1993.4



着々と進むルンビニー園・マヤ堂考古学調査
(関連記事 6, 7 面)



財団
法人

全日本仏教会

JAPAN BUDDHIST FEDERATION

第二十一回「業・旃陀羅問題」に関する研究会

臨済宗妙心寺派
教学研究室長

小林圓照師が発表

本会の同和委員会が主催する、第二十一回「業・旃陀羅問題」に関する研究会が、二月十八日午後一時半から、臨済宗妙心寺派花園会館で開催された。

臨済宗妙心寺派教学研究室長・小林圓照師が、「旃陀羅について―臨済宗の立場から―」と題して、要旨次のような発表を行った。

※ ※ ※
1、同和推進について思うこと

「旃陀羅」ということは、臨済宗ではあまり出てこない。それは、臨済禅は中国において発達した仏教であり、比較的インドのこゝとばを使わないといふこともあろうかと思う。しかし、こゝとば等の差別事象がないから差別意識がないということではない。

(A) 聖と俗

我々は聖なる世界、俗なる世界の、二つの価値の世界に住んでいる。倫理、道徳といった社会的事象とは切り離れた部分で、宗教的な真実としてこの二つの世界がある。つまりこれは宗教者としていつも眼前にあり、それは限りなき課題であると考える。

禅のこゝとばにある「上求菩提、下化衆生」とは、この二つの世界を表している。我々が宗教を社会的側面という視点から見て行くところのこゝとばである。それから大応国師の『御遺戒』にある「夫れ仏門に入る者は、当に深く出家の尊貴なることを信ずべし」、「出家の法は貧賤を脱する道なり」とは、一つの相対的な世界を越えた世界をいつている。これは大応国師が弟子たちに尊貴、貧賤という価値観を導入して話しているのだが、現在の我々が取らない表現である。しかし、これが差別的表現だということではなく、そういう物の提示法がここに出てきていると見たい。

悉有仏性という立場と、我々が罪惡深重の衆生であるという、この二つの立場をどう位置づけをするかという問題がある。多分、信心ということでもまとまるのであるが、これをどう位置づけするかというのが、一つの課題である。

(B) 自覚的・主体的な取り組み

宗教の基本である、へいま・こゝ・わたしという立場は、主体的、自覚的に物事を捕え

るということであり、他人事あるいは対岸の火として物を見ないということが、宗教者の在り方であろう。

禅問答等では叩かれて「お前はどうか、お前はどうか」と確かめられる。「お前はどうか」というこの立場は、現在における本當の立場を聞いているのである。如来蔵、仏性は仏教にあらずというような考え方があつたが、これらの問題にしても禅では、単に如来蔵思想の理屈がどうかと、仏性論が思想的にインド、中国から日本へ渡つてどのように展開したかなどと聞いていない訳で、師匠が弟子を叩いて「お前の仏性はどうか」と聞いている訳である。したがって、今まである仏性の形、如来蔵の形はみんな一つ一つ叩かれて、点検されている。

(C) 義務と自然法爾

これらの問題に対処するのは、一つには義務感というものがある。こゝでいうのは倫理・道徳の義務ではない。ゆつたりとしたありのままの真実、心が説かれる、解放されるというところから出てくるものである。

単なる義務ではなく、自然に出てくると、そういう面も宗教と同じ立場ではないかと思うのである。

2、『楞伽經』における「旃陀羅」

『楞伽經』の諸本の内、十巻本の「遮食肉



小林圓照師

品」には「旃陀羅」が大悪人と併記されて出てくる。

この旃陀羅の概念の幅は、非常に広いものであると思う。すなわち、旃陀羅とはインドの四姓制階級社会のアウトカーストの最も下だとか、また初期大乘仏教に入ると非常に差別的な形で、様々な経典の中に入ってくるといわれる。

旃陀羅は種族として理解される場合、それから政治的にダーサ(奴)という形で征服された人々、あるいは政治的に阻害され隅に押しやられた人々として、アウトカーストの中に組み込まれていったのではないかと理解される場合、職種として区別されたのではないかと等々と考えられる。

3、『景德伝灯録』における「旃陀羅行」

ここには鳩摩羅多尊者が闇夜多尊者の疑問に答えるという形で、「旃陀羅行」のことが出てくる。すなわち、「旃陀羅の行」とし

て、明らかにその当時差別された仕事をしていたということが、このニュアンスではっきり分かる。

『景德伝灯録』は禅の各祖師の歴史を知る上で、分かりやすく、簡略にして文章を整えて行く中に、オリジナルなニュアンスをだんだん消して行く、その中でこのことばが使われているということからも、時代の状況がよく分かると思う。つまり仏教にかたよらない、そういう邪悪な行いをするということばとして「旃陀羅の行」という形でまとめられた。すなわち、当時このことばを使えば中国でも大体「旃陀羅」の行とはこういうことだと、分かっていたのではないか。

4、『金剛経』における「軽賤」の問題

『金剛経』はこれを受けることによつて前世の悪行が消滅するということを説く。そこで三世にわたるありさまを説く中に、「軽賤」ということばが出てくる。しかし差別的な罪業意識を強めるような取り扱いにはなっていないように思われる。

5、烏枢沙摩明王の理解

この烏枢沙摩明王の問題については、禅の方では『住職座右』に、「世の中の一切のけがれ云々」とあり、ここには旃陀羅のことばが出るすきまはないが、これを編集した人がどれだけの意識があったのかは分からない。

6、祝聖の理解

禅では、一日と十五日に今上天皇の聖寿万歳を祝禱する行事として祝聖諷経がある。これは住職の晋山等にも行われ、天牌と共に、宗派の委員会等でも取り扱いが問題となっている。

7、結語

臨済宗では日用の経典・宗典の中に「旃陀羅」のことばはほとんどないが、その取り扱いは関しては、曹洞宗あるいは真言宗各派の見解に示されたごとく、差別意識を含む用語として使用されていることが認められる。

また、三世にわたる悪しき業思想につながる「軽賤」の構造などの思想が見られる。

烏枢沙摩明王の牌や祝聖の行事を、解消すべき遺制であるかどうかの検討は、今後本派の「同和指針」に基づいた活動の中で取り組んで行くべきである。

また、共業・不共業の問題については、被差別の人々を不共業の世界ということとで隔絶して、その責任を問うという形で、宿業を用いるということは間違った考え方である。しかし、一般に社会業としての共業ということを書いてしまうと、今度は差別する側としての反省の主体の座がぼやけてしまうのではないかと思う。宗教的な深さでそういうものをどう捕らえるかがこれから問題である。

日本仏教の可能性

国際日本文化
研究センター教授

山折哲雄

去る一月二十八日、京都グランドホテルで開催された本会の理事会・評議員会で、国際日本文化研究センター教授の山折哲雄氏は、「日本仏教の可能性」をテーマに、要旨次のような記念講演を行った。山折氏は、今後の世界で、仏教思想が果たす役割は増大するが、そのためには三つの鍵が必要になると主張、出席者から、盛んな拍手をあげていた。(文責・社会部)

宗派間の垣根を低く

日本仏教の可能性を国際的レベルで考えるかどうか。日本仏教には個性を持った様々な宗派があり、それをどう統合していくか、現代化していくか、ここが非常にむづかしい。

今、世界的な規模で、民族と宗教に起因する紛争が火を吹いている。これは今後、ますます増えると思われる。その解決のために、どういう原理を差し出すことが出来るか。キリスト教では必ず、神の超越的価値、絶対神という基準、及び理性の強調を諸民族、諸宗教統合の原理として出してくるに違いない。

それに拮抗する仏教的提言は何か。一つは仏教の内面的価値観、超越的な価値に対する内面的価値、もう一つが不殺生という考え方に基づく非暴力の思想だろうと思う。

キリスト教的原理と仏教的原理が、凌ぎをけずるのが、二十一世紀だ。どちらが説得力を持つのか。凌ぎ合いの中から、民族と宗教の紛争を解決する、現実的な思索が生み出されるのではないか、と思っている。

その場合、仏教の内面を重視する価値観と非暴力、こういう問題に対して、各宗派でそれぞれの主張があるだろうが、とりあえず考えられるのは、浄土教系教団の一神教的な価値観の再編成ということだ。阿弥陀仏への信仰は、仏教の中では最も一神教的な性格が強い。その価値観と、禅仏教、瞑想仏教の内面的価値観を結びつける、浄土系思想と禅的思想の統合こそ、まず必要になると思う。

そのためには、各宗派間の壁、垣根を低くしなければならぬ。それが世界的な外圧、客観情勢として、日本の仏教教団への要請となる、そういう時代が二十一世紀だろう。

山岳仏教の復権を

第二番目は、山岳仏教の再評価である。今日、山や森林の持つ意味が、ますます重要視されるようになった。それを二千年の歴史の中で、最も鋭く強調したのが仏教だった。

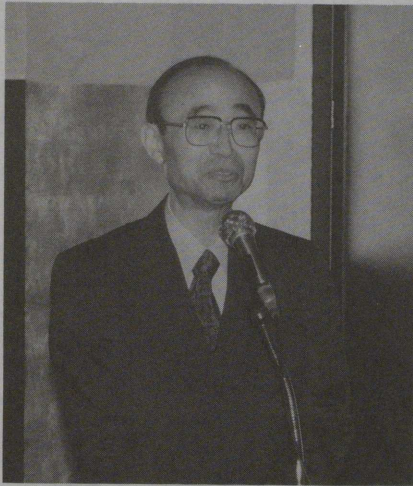
現在日本では、都市生活者が全人口の七八パーセントに達している。一億人に近い人が、都市のゴミゴミした中で暮らしている。その人たちの心の底にあるものは、都市以外の世界への憧れではないかと思う。

都市以外の世界とは、山であり海であるわけだが、中でも山岳地帯は、平安時代以後、日本仏教の霊場として、修行道場として、特別に聖なる世界とされてきた。

最近の巡礼ブーム、西行、良寛、芭蕉が読まれ、『清貧の思想』(中野孝次著)がベストセラーになる、山頭火の本も売れている、これらは、放浪、遊行の世界に多くの人が憧れているためではないか。

こうした生き方が、現実全ての人に可能かどうかはわからないが、都市化が進むほど遍歴願望、都市生活から出ることによって自分を発見したい、自分探しの旅、そうしたものに對する熱い思いが、巻き起こってくるだろう。

今日の仏教は、奈良時代の仏教とよく似て



山折哲雄氏

いる。奈良仏教は、学問仏教であり、合理的、輸入仏教、都市型仏教である。明治以降の仏教の性格は、經典の合理的な解釈を基としており、その方法は外国の学問による。奈良仏教が中国や朝鮮の学者によって指導されたように、近代の仏教学は、ヨーロッパの法論に基づく。それを教えてきたのが、宗門大学である。

そこでは、仏教はヨーロッパの価値観と矛盾しない、合理的な宗教だということ、研究が進められてきた。そうしたところに教育が集中したため、日本の仏教徒の感覚に、仏教は合理的であり、近代的な諸価値と矛盾しないという錯覚が生じてきた。その錯覚がここにきて限度となった。

そういう近代仏教から離れて、もっとその奥にある、カオスを湛えた無限のわけのわか

らない価値を持った宗教世界へ、我身を投じて新たな生の甦りを経験したいという願望、それが巡礼ブームの背景にある。奈良から平安への転換期に、奈良の合理仏教をおかしいと考へ、奈良的都市世界から身を脱して、お山へ登っていったのが、伝教大師であり弘法大師であったと思う。

山に登ることによって民衆の信頼を得なければならぬという時代が、今、またきているのではないか。

それは地球の環境を守れ、山を守れ、森林を守れ、資源を守れという主張と、重なってくる。森林世界こそ、高い精神性において人間性を育むという思想が、平安時代の山岳仏教と今日のエコロジーブームの共通基盤をなすという予感を持つ。

「死」を考え直す

第三番目は「死」の問題である。最近お葬式に行くと、いつも落胆するのは、お坊さんに迫力が無い点だ。参列者が私語を繰り返している、一喝するだけの迫力が無い。回りがザワザワしていると遺族が落ち着かない。葬儀から緊張感が失われる。

何故そうなったか。仏教の本質は葬式などがないと、明治以降教え続けてきたためだ。人間は死ななければならない。死に臨んでそ

れをどう送るのか、そうした人生最大の重要な儀式を「葬式仏教」などと自ら軽蔑してきた。そうした点でも、大学仏教からの脱却が重要となる。

『往生伝』などを読むと、多くの修行僧たちが、命を終える最後の段階で、木食、断食を行って自分の死期を決していた。最近ホスピスなど、臨終期の医療がどうあるべきかが話題となるが、そうした時に問題となるのは、病院や医師についてである。死んでいく人間が、どう自分の死を決するかは、議論とまらない。しかし宗教の側からいえば、そこが一番重要であろう。

さらに看護という問題がある。奈良時代から看病僧という伝統が日本にはあった。ところが近代社会では、看病僧的な呪的側面は、どんどん切り捨てられるようになる。明治以降の仏教学は、そういう呪的なマジカルな世界を否定してきた。しかし死の問題が、全人類の課題となってきた今日、人が人をどう看取るかは、重大な問題となってきた。

良寛には、その最後を看取った貞信尼という弟子がいる。私は貞信尼は、まさに看病尼僧だったと思っている。近代仏教がほとんど無視してきた、長い伝統を持つ看病僧の役割も、再評価していかなければならないと思う。

マヤ堂考古学調査進む



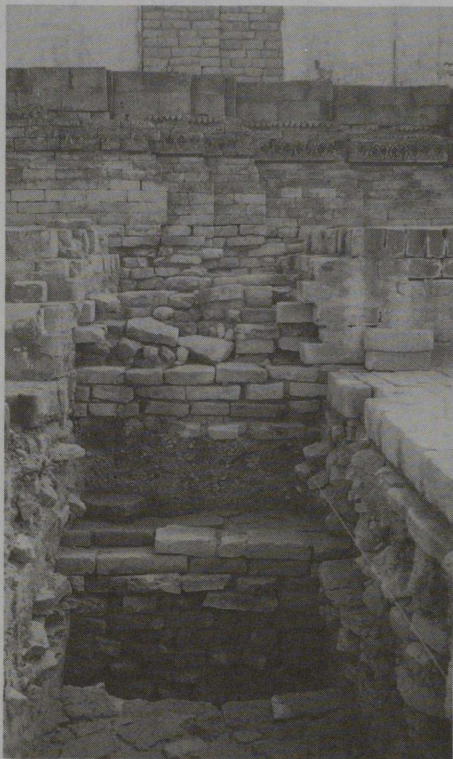
マヤ堂の基壇上で開始された試掘（上）



マヤ堂と菩提樹との間の試掘が終了し、記録をとっている（下）

ネパールのルンビニー園では、昨年秋から上坂悟、荒川維久両氏によって行われていたマヤ堂の考古学調査が、ほぼ予定通り進行し、三月いっぱい第一期作業を終了しました。現地より、調査の様相を伝える写真が届きましたので、その一部を掲載します。

なお四月に入ると、日中の最高気温が摂氏四〇度以上に上昇し、雨期となるため、作業は一時的に中断されます。調査は秋に再開され、一九九三年度中には、全てが終了する予定になっています。



基壇北東側（菩提樹側）下部の試掘現場（右上）



基壇南側試掘溝、約190cmの深さで出土した古代レンガの確認作業（右下）



基壇西側（アショカピラ側）の試掘溝（右）

◎申込先 東京都港区芝公園四一七―四
全日本仏教会

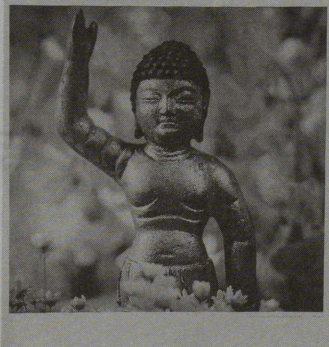
◎サイズ 七五センチ×五二センチ
◎定価 一枚 百円
送料実費

下記の要領にて頒布いたしますので各県仏、都市仏、各寺院、幼稚園、保育園などで広くご利用下さい。

明るい春の野に静かに立って、天と地をさすお釈迦さまの姿は、見る人の心に安らぎをあたえることと思います。

* 4月8日はお釈迦さまのお誕生日

花まつり



花まつりポスター

栃木県仏で講演会

栃木県仏教会主催の講演会と実務講習会が、去る二月十七日午後一時から、県内の寺院関係者約七十名の参加者を集め、宇都宮市・ホテルニューイタヤで開催された。

講演会は真言宗豊山派西明寺住職・田中雅博医師が、「一仏教者の立場から見た生命―益子町小川昌子さんの事例を通して」のテーマで、実務講習会は本会顧問弁護士・長谷川正浩師が、「寺院のかかえる諸問題」と題して講演した。

田中師は、医療と宗教を考えるにあたり、古典研究により人の生き方を考えるヒューマニズム（人文学）と、反証を条件とする科学の両方が必要であると主張した。

医療の根拠には、医学があり、これは科学ともいえ、医学文献索引（インデックス・メディックス）に入っている論文の全体が現代医学であり、当然そこには実技が必要である。そしてもう一方の根拠には、ヒューマニズムがある。これはことばを主体とする古典研究である。田中師は、内科医として医学という科学の領域と、ヒューマニズムを担当する僧侶として、今回の場面に対応したという事になる。

つづいて、現在話題となっている、小川昌子さんの事例の経過について話があり、最後に田中師は、限られた生命をいかに死ぬか、一人ひとり答えが違って当然である。尊厳死協会が用意しているリビングウイルだけでなく、多くの選択肢があったほうが良い。そこで、①曼荼羅のリビングウイルを多用する、②檀信徒にリビングウイルを作っていた、の二点を提案した。

つづいて、長谷川師による実務講習会が行われた。長谷川師ははじめに、戦後の寺院が農地解放政策によって、経済的な基盤を奪われる等、これらを取りまく環境が一変してしまつた経緯を説明。それにつづいて、寺院をとりまく法律相談として、質疑応答形式で話が進められた。都市計画道路の境内地通過の問題、他宗教に入信した檀信徒の墓地使用の是非の問題等、参加者から寺院の現状を反映した質問があつた。

哀 悼

山口 貴美子（元全仏評議員）

三月六日、九十歳で死去

真言宗豊山派仏教婦人会会長

渋谷 有教（元全仏副会長）

三月十三日、七十六歳で遷化

真宗仏光寺派前門主

事務局録事

一三月一

一日 局内会議

四日 同和委員会

十日 日和委員会

十一日 法律相談室

十五日 局内会議

十七日 文化庁協議会出席

二十五日 法律相談室

二十六日 同和推進担当者会議

ルンビニー委員会

二十九日 同和研究会

寺院用具

浅草通り五鳳会加盟店

株式会社 決田商店

東京都台東区寿2-10-9 (地下鉄田原町駅前)

電話 代表 (3841) 4965

一九九三年四月一日発行
四月号 第三八七号
発行人 旗本宏昌
発行所 財団法人 全日本仏教会
〒一〇五 東京都港区芝公園四一七一四
電話〇三(三三三三)七二七五